

Title	被災地の子ども支援(第二回東日本大震災国際神学シンポジウム：分科会報告 G)
Author(s)	米内, 宏明
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 149-155
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4928
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

被災地の子ども支援

米内 宏明

1. Solaの立ち上げ——子どもの笑顔のために

黒褐色の泥土。夜は漆黒の闇。でも晴れた朝にはまぶしいほどに澄み切った青い空が広がっていた。今も印象深く私の目に焼き付いている被災地の光景である。そこでの出会いと経験が、その後「Sola」という団体を立ち上げていくきっかけとなった。

Solaは、被災地の子どもたちを対象とした学習支援を通じて、地域サポートを行っている。震災直後、学習環境とやる気を失っていた子どもたちのためにと願って始めたものである。また、県外キャンプや海外との交流も企画して活動している。子どもたちの今を支援することは、彼らの将来だけではなく、その家族とコミュニティの将来を支援することと受けとめている。子どもたちの将来は、東北と日本の将来である。だから、少なくとも一〇年は付き合うつもりでいる。

Solaは、*“Serve for Others, Live with one Another”*（他者のために仕え、お互い一緒に生活してゆく）という意味を込

めている。そしてSolaはどこまでも続く、どこまでもつながる青い空（そら）である。それを実感したのは、世界各地から子どもたちへの支援と祈りの声を受けた時である。事実、それでSolaは一步を踏み出すことになった。被災地にいる人々は決して孤立してはいない。東北の地にあつて、世界とつながっている感^①は、それからの私自身の世界観にも少なくない影響をもたらした。

ここで述べることは、神学的考察というようないようなものではない。ごくごく身近な出会いの事例である。そしてそこから与えられた気づきの紹介である。

最初に、私たちが被災地に入ったのは、震災直後のことだった。教会の方々が自発的に用意してくれた支援物資を携えて、志を持った青年たち一〇人と出かけた。被災地で連絡の取れた人たちとつながって、手探りで動き出した。まずは、被害を受けた教会の泥出しをやる^②と決めていたが、それ以外は、どこにどんな必要があり、どんな手伝いができるのか不明だった。そこで、現地での情報集めに手分けをして動き、他団体の方々と一緒に行動した。

震災から一〇日ほど経った日、手がかじかむ冷たいみぞれまじりの雨雪が降る中で泥出しをしていた。そこは宮城県一の町であった。

一人の男の子が私たちに近づいて来た。リョウくん（仮名）と名乗った。小学校五年生の彼は、そこにいた青年たちと談笑し、遊んだ。普段であれば何気ない光景だったろう。陽が傾きかけ、寒さが厳しくなり始めた頃、その子を迎えにお母さんがやってきた。雨よけに段ボールの切れ端を頭の上にかざしている。傘がないのだ。

近づいて来た彼女は自分の息子の様子を見て、こう言った。「この子が笑顔を見せたのは、震災後初めてです……」。そう言ってお母さんは涙を流した。リョウくんが被災した自分の家の外に出たのも、その日が初めてであったという。

お母さんの涙とリョウくん^③の笑顔を見て、そこに皆が同じ思いを持った。リョウくんと同じような子どもたちのため

に何かをしたい。それから子どもたちのために動き出した。泥土に覆われた地区で色とりどりの風船を使って思い切り遊ぶバルーンフェスティバルを開催した。それからスポーツ、季節行事などにも取り組み、学習環境と意欲を失っている子どもたちのために次第に学習支援へと移った。

出会った方々との経験から、多くの気づきが与えられた。教会の持つ可能性と役割、この世界への責務／負債を認識することになった。

2. 悲しみに寄り添う——死と信仰の受け止め

クリスチャン大学生たちのボランティアを受け入れて、震災後のがれき撤去や炊き出し等をしていた四月頃のことだった。休憩していた彼らの背中越しに、一人の男性が吐き捨てるように言った。

「お前たち、線香の一本でもあげていけ！」

彼らは怒鳴られたことにまず戸惑った。なぜなら、怒鳴られるようなことはしていないからである。状況はこうだ。彼らが活動していたその場所は、今回の津波でその男性がお母さんを亡くしたところだったそうだ。その場所で無神経にも記念写真を撮っているボランティアの姿をこれまで何度か見かけ、今回たまたまそこに居合わせた彼らに悲しみと怒りをぶつけたらしいのだ。もちろん彼らはそういうことはしていない。むしろ、その男性の声をよく聞き出したと思う。

そして、もう一つの戸惑いは、線香をあげてほしいというこの男性の思いをどう受け止めたらいいいのか、ということであった。学生たちはクリスチャン家庭に生まれ育ち、これまで線香をあげた経験など一度もない。その戸惑いを、彼

らは戻って来てから私に報告してくれた。そしてそのことを夜の会合のテーマにした。

「死」を抜きにしては被災者と関わりたくない、と誰もが気づいた。生き残っている人々の背後に多くの死がある。それは大人だけではなくて、子どもたちも同じだ。子どもたちも口にはしないが、その小さな背中に親、家族、友人らの死を背負っているのだ。支援する者たちは彼らが背負っている死も一緒に背負わなければならないのである。

しかし支援者も若ければ、死に向き合うことはあまりない。クリスマスチャン家庭であれば、なおさら非キリスト教的な死者儀礼の経験が少ない。だが、あの現場で問われたのは、クリスマスチャン家庭の青年世代のことではない。また、単に線香をあげるかどうかという話でもない。「死」そのものを人間がどう受け止めて生きるのか、というおおよそクリスマスチャンにとつての実際のテーマであった。

同行していた一人のスタッフがこう口を開いた。「被災した子どもを支援するとき、きつとこの子のお父さんお母さんが生きていたら、この姿を見て喜ぶだろうなとか、こうしたらきつとうれしだろうなと想像して子どもたちに接している。それは教会で親を亡くした子どもと接した時から、そう思うようになった。その意味で、子ども支援は私にとつては死者儀礼でもある」と。

河北新報（宮城県の地域新聞、八月一日付）の一面トップに、「供養の場奪われ苦悩」との大見出しがあった。寺院や墓地も被災したので、簡素な葬儀、他宗派での葬儀をやむなく行わなければならず、人々の割り切れない心情と苦悩の声を紹介されていた。

もし被災した寺院のお墓の修理、片付け、あるいは修繕を依頼された場合、私たちはどうしたらよいのだろうか？ 人の死を扱うことは、死者儀礼のみならず、他宗教の人々の死と信仰をどう受け止めるか、つまりはその人人格（whole person）をどう受け止めるか、ということにつながる。今回の震災で無数の死を遂げた人々とその遺族の痛みへ届くた

めには、他宗教への対応を表面的なことでせず、その関係に一步踏み込む努力が必要であった。

プロテスタント福音派がそのメッセージの中心とするのは、イエス・キリストの十字架の贖罪死だ。このメッセージが被災者にどう意味づけられるのかも問わなければならない。

ある被災者がこう語った。「私がこうして生き残ったのは、私のために犠牲になってくれた人がいるからだ」。

感動的な話に聞こえる。しかし、その人はこう続けた。「生きていることがつらい。誰かを犠牲にして今自分がこうやって生きていることがつらい」と。

神・罪・救いのパターン化したメッセージでは、キリストの死の重さも、身代わりで生き残る生の重さも見えてこない。ここで重要なのは、私たちが理解していると「思い込んでいる」福音の概念自体を問い直すことである。これまでの枠組みに逃げ込んで自分も他者も納得させるのではなく、むしろ枠そのものを壊してくれる現実から目を背けないことである。神学が実践の現場から構築されるのであれば、その現場に立つ勇氣が必要なのである。

3. 被災者を犠牲者にしない

震災の翌週からボランティアとして活動していた私たちは、津波で泥だらけになった家屋の中から、貴重品を探し出す作業をしていた。汗だくになって一日中片づけをしても、十分なことができないジレンマを感じながらの作業であった。それはボランティアである私たちよりも、その家の方々のほうが感じていたことであろう。

私たちはわずかな昼食を外で食べ、他の食料や物資は被災した方々に受け取ってもらうことにしていた。しかし、実

際は違った。被災した方々がボランティアの青年たちに食べものを振舞ってくれたのだ。青年らはどう対応したらよいか困った。遠慮して断ったのだが、ぜひと手に握らされてしまうのだという。岩手県出身の私はその様子を聞いて、東北人らしいなあと、どこか誇らしくも感じた。

東北人のそういうカルチャーの言葉だと思うのだが、こんな言葉を耳にする機会があった。「おがまいねぐ（お構いなく）。こちらが助ける側であることを自負していると、この言葉は助けを拒むようにさえ聞こえてしまう。でも、勝手に作り出される「助ける側」と「助けられる側」の構図に自分たちが押し込まれることを、被災者の人々は「お構いなく」で壊していたのだと思った。

作り出されてしまうこのような構図は、震災当初よく耳にした「想定外・予想外」というフレーズを被災地以外の人々が使う状況と似通っている。「想定外の被害」「予想を超える状況」などというフレーズを被災現場で耳にすると、いかにも冷たく響いてくる。むしろ、想定外という言葉は、地元でない人々の言い訳にしか聞こえてこない。

たとえば浜の漁師さんらは、「津波が来るからつてここを離れらんねえ」「俺たちに漁をやめろつていうのが？」と、必ずと言っていいほど口にした。津波は今回に限らず、最近では四〇年に一度ぐらいの割合で東北地方を襲っている。地元にとって、津波は想定外ではなく、「来るもの」なのだ。

もちろん、被災した人々は満身創痍、身体も心も傷を受けている。そこに想定外、予想外と言いつても、そこにいる人たちにとつてみれば、何も解決しない。それに対し「お構いなく」は、すべてを引き受けて、そこで生きようとしていく人たちの覚悟と誇りのほどを示しているように私には思えてならない。

結局、「お構いなく」が示しているのは、物事や状況に対する見方、感じ方へのコントラスト、あるいは関係構図の

ギャップというようなことは、私たちの日常のあちこちにいくらでも潜んでいるのだ、ということである。

その関係のギャップは、たとえば「犠牲者」という言葉を使うときにも見られる。犠牲という語は、本来「いけにえ」を指し、あることのために大切な命や、かけがえないものを提供することを意味する。被災者が大切な家族や人々のために自らを犠牲にした、ということとはあった。しかしその表現は、その当事者間で共有できる内容なのである。もし、そこにいかなかった者が被災者を「犠牲者」と呼ぶのであれば、自分のために被災者は犠牲になった、ということをお口にしていることになる。そうであれば、私たちはそういう犠牲をもたらす構造を抱えていたのだ、という問いに向き合わねばならない。このような犠牲の構図は、今度は別の人が、あるいは自分が誰かの、何かの犠牲になることさえあることを示している。

そういう誰かの犠牲の上になりたっている日常は正常なのであろうか。

「犠牲者」という言葉を使うときに、このような問いへ切り込むことなく、被災者を単に「犠牲者」として位置づけ、終わってしまったてはならないと思う。なぜならキリストの十字架は、人間が犠牲になることに終止符を打ったはずなのだから。

教会こそは誰かを犠牲にして形成されることをよしとせず、むしろすべての人を生かすところであるはずだ。教会はそうでなければならぬ。十字架の真のメッセージを語る教会だからこそ、人々を生かし、人々と共に生きることができると受け止めている。

Solaがその名前に“……Live with one Another (laの部分)”を入れているのは、被災者を犠牲者とせず、被災者と共に生きたいという願いを持ったからだ。そして、被災者を犠牲者として終わらせず、彼らが世界で痛んでいる人たちの希望であるようにと願い、微力ながら被災された方々のために国内外との交流事業にも取り組んでいる。

(本原稿はクリスチャン新聞より転載の許可を受け、表現には若干の修正を加えた)